

蝶の博物詩

生態 9

蝶と花3



オオゴマダラとセンダングサ
(2005年11月26日 竹富島)

photo by

Nishiyama



ヒメギフチョウとフキノトウ
(2010年5月2日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態9

蝶と花3

関東地方の平地では啓蟄を過ぎると野外で蝶がみられるようになる。黒姫山の麓、標高600メートルほどにある山小屋では1カ月遅れで春の蝶が姿をみせる。この頃の蝶たちは2つのグループに分けられる。1つは寒い冬を成虫で越し、これから産卵する構えのタテハチョウなどであり、もう1つはこの春に羽化し、“spring ephemeral”（短い命の春の女神）と呼ばれるギフチョウなどである。

春の蝶は、大量に栽培された園芸種よりも可憐な野草を好む。そのなかでもギフチョウ、ヒメギフチョウとカタクリ（本誌32巻5号）、タンポポとベニシジミやジョウゼンシジミ（本誌19巻2号）、ユキヤナギとツマキチョウなどの組み合わせはこの上なく美しい。

早春の里山でもっとも早く眼につくのは雪を割って現れるフキである。フキノトウといい、山菜となるのは鱗状の包葉をつけた多数の花茎と葉柄であるが、花茎の先端にみずばらしい頭花がある。ほかの花の乏しい里山では、ここでも仕方がないとばかり、種々の小さな虫が来る。ときにはアブ、ハエの仲間に混ざって、越冬後もなお美しさを保っているクジャクチョウをみる。

図のようなヒメギフチョウは元来カタクリのピンク色に強く惹かれるが、林間のカタクリが著しく減少したので、やむをえず道端のフキノトウで吸蜜しているのであろう。近年のカタクリの減少の理由として、里山の乱開発のほかに、外来種のハチが、花被片の横から、オシベに触れずに侵入して蜜を盗むことも一因として挙げられている。

一方、一年中くり返して発生する南の沖縄では蝶の種類は本州中部の山地に及ばないものの、その数は圧倒的に多い。ツマベニチョウとハイビスカスの組み合わせがもっとも絵になるが、その他にランタナ、サンダンカなど花期が長いものや、センダングサの小さな白い花が多く蝶にとって大好物である。

センダングサはフキと同じキク科の一属で、“ひつつきむし”といえど誰でも知っている世界的な雑草である。その果実、いわゆる瘦果にはとげがあり、衣服に付着して分布を拡張していく。

八重山諸島の海辺、路傍に無数に咲くセンダングサにはあらゆる種類の蝶が訪花する。小はシジミチョウの類から、大は本邦最大といわれるオオゴマダラ（本誌17巻10号）が、ぶら下がるように吸蜜している。

かつて、宮古島のタチアワユキセンダングサから作製した健康茶がアトピー性皮膚炎やlivedo racemosaに効くと喧伝されたが、蝶にあまねく愛される特徴から思いついたのであろうか。

石垣島では雑草としてのセンダングサの繁茂に困り、枯葉剤を散布して蝶の花園を壊滅し、その跡に緑色の汚い人工芝を張ってごまかした道路をみたことがある。

西山茂夫